

年間第二十五主日

2018.9.23

マルコ 9・30-37

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高神父

「途中で何を議論していたのか」。イエス様にそう尋ねられたとき、弟子たちは黙っていたと今日の福音は語っています。バツの悪そうな弟子たちの顔が浮かんでくるようです。気まずい沈黙の時間が流れたことでしょう。

話は変わりますが、わたしたちは普段の生活の中で、多くの場合、落ち着いて祈ることに難しさを感じています。仕事や生活に追われて、なかなか、そのようなゆとりをもてないことが、一番の理由であることに違いありません。しかし、少しでも祈りの経験のある方はお気づきのように、わたしたちが祈ることを敬遠しがちであることには、もう少し深い理由も考えられます。祈りの本にある、決められた祈りを唱えたり、覚えている祈りをするだけなら、その気になれさえすれば、そう難しいことではないかもしれませんが、心を落ち着けて神様の前に身を置くという、祈りで一番大切な、基本的なことになると、そう簡単ではありません。何故かと言うと、そうやって神様の前に静かに身を置いてみると、わたしたちの心にも、弟子たちに向けられた今日のイエス様の「途中で何を議論していたのか」という声が聞こえてくるからです。静かに祈りたい、祈らなければという想いは、信仰生活を大事に思う人なら誰の中にもあるはずです。けれども、そうであればあるほど、心を静かにして祈ろうとすると、あのイエス様の声が聞こえてくることを、わたしたち経験的に知っているはずです。祈るということはわたしたちの日々のありようを、省みさせられるということだからです。そして、そのようなことは必ずしもわたしたちにとって、気分のよいものとは限りません。「途中で何を議論していたのか」とイエス様に尋ねられたとき、弟子たちが味わったような、バツの悪さ、気まずさをわたしたちも感じるようになります。そのようなことも、わたしたちを祈りから遠ざける原因であるように思われます。

「途中で何を議論していたのか」とイエス様に尋ねられたとき、もちろん弟子たちはもうお互いに議論する様なことはしていません。けれども、道すがら、誰が一番偉いかというようなことを議論してきた弟子たちの心には、その議論がそのまま燻り続け、わだかまりを残していたことでしょう。そのような弟子

たちを前にしてあの時、きっとイエス様は「やれやれ」と言うように、その場に腰を下ろされたことでしょう。そして弟子たちにも、「まあ、座りなさい」と言われて、彼らをお側に招き寄せられたのだと思います。

わたしたちがそれと気づかぬほどに、わたしたちの生活の隅々にまで忍び込み、わたしたちの心のありようを支配している競争社会の中に生きるわたしたちも、弟子たちほどあからさまではないにしても、わたしたちの道の途中に湧き起こる「誰が一番偉いか。誰が一番得をしているか。その中で自分と自分の家族はどれくらいの位置にいるか」といったようわだかまりを抱えているかもしれませぬ。そのようなわたしたちが祈ろうとするなら、イエス様はあの時と同じようにわたしたちにも、「まあ側に来て座りなさい」と呼びかけてくださるに違いありません。

祈りの一番大切な要点は、イエス様に招かれて、イエス様のお側に座らせていただくということです。

「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」。道を歩きながら、自分たちのうちの誰がいちばん偉いかというようなことを互いに議論していた弟子たちには、イエス様のこのおことばだけで十分だったはずでせぬ。イエス様の生きかたを、他の誰よりもよく知っていたはずの弟子たちです。イエス様にこのように言われたとき弟子たちはみな恥じ入って、自分たちの浅はかさを悔いたことでしょう。けれども、今日の福音はこのイエス様のことばで終わってはいませぬ。イエス様ご自身、このことばだけで弟子たちを、そしてわたしたちを納得させることが出来たとは思っておられないかのようです。イエス様に「仕える者になりなさい」と言われると、今度は「仕える者」になる競争が始まることをイエス様はご存知なのかもしれませぬ。これに続くイエス様のあのときの行動はきわめて印象的で示唆に富んでいます。

イエス様は一人の幼子の手を取って、弟子たちの真ん中に立たせ、その子を抱き上げて、「私の名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、私を受け入れるのである」と言われます。

母親に手を引かれた幼い子や、乳母車の中の赤ちゃんがこちらを見つめて微笑みかけるとき、目と目が合って、思わず足を止めてしゃがみこんだ経験をお持ちの方も多いことでしょう。あるいは、道端で一人泣いている幼い子供に気づけば誰でも、足を止めて、その子の母親の姿を捜すことでしょう。そのような子供をイエス様がなされたように抱き上げるためには、足を止めて、しゃが

みこまなければなりません。我先にと道を急いでいては、決してそのようなことは出来ません。「このような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのだ」と言われて、イエス様が弟子たちにして見せてくださったことは、そのようなことだったかもしれません。足を止めて、しゃがみこんで、幼い子供を抱き上げれば、その子の体温のぬくもりがこちらに伝わってきます。幼い子供のもつ特有の懐かしいにおいが伝わってきます。イエス様を受け入れるために必要となることも、同じかもしれません。いつもの、何かに追いかけているような、早足になっている歩みを止めて、しゃがみこまなければなりません。そんなことをしては、時間に遅れ、人に先を越される、そのような心配が浮かぶ余地がないほどに、こちらを一心に見つめる幼子の目に引き寄せられるように、イエス様に引き寄せられて、その御前にしゃがみこめたらと思います。幼子のふくよかな温もりが伝わってくるように、イエス様の暖かさに包み込まれている自分に気づくことでしょうか。そしてイエス様と共に、御父の広大な愛の広がりの中に生きる自分を取り戻すことが出来ることでしょうか。

祈りとはそのようなことではないかと思います。そのような祈りのときを持つことによって、我先にと追いまくられる競争社会の中で、わたしたちの信仰生活の中に、心のオアシスを見出すことが出来るのではないかと思います。今日の福音をそのような角度から味わって見たらどうかと思いました。

今日の福音に戻って付け加えるなら、イエス様がご自分の受難の死を予告するたびに、福音書は、それを弟子たちが受け止められなかったと語っています。イエス様が進もうとしておられる方向と、弟子たちの心の方向が正反対を向いているからです。それでも、イエス様はそのような弟子たちを連れて、そのような弟子たちと共に十字架の死が待ち受けるエルサレムに向かって進んで行かれます。十字架のときが来ると、弟子たちがみな逃げ去ってしまうことも、イエス様はわかっておられたかもしれません。それでもご自分から弟子たちを見捨てようとなさらないのは、イエス様が十字架の彼方に復活を見ておられるからです。父なる神が定めておられるご自分の歩む道が、イエス様にははっきりと見えているからです。誰がいちばんえらいかなどといった愚にもつかない議論をしながらも弟子たちはそのイエス様の後について行きます。わたしたちも、生活の上の様々な思い煩いを抱えつつも、イエス様の後についてゆきたいと思います。いつか、イエス様が言っておられたことの意味が、わたしたちにも分かるときが来ることを期待して、そのことに希望をおいて歩んで行きたいと思います。